

疫病がもたらした社会変革の好機

分割が科学の本質

科学の本質は分割にある。自然を動物、植物、鉱物に分割し、さらに動物や植物は界、門、綱、目、科、属、種と細分していく。一例としてライオンは動物界、脊索動物門、哺乳綱、食肉目、ネコ科、ヒョウ属、ライオンとなる。このように分類すると、地球に存在する動物と植物は三〇〇〇万種から九〇〇〇万種と推定されるが、人間が発見して名前を付与した生物は約一八〇万種で、大半の生物は人間にとって未知の存在である。

この分類の体系を発明したのは一八世紀に活躍したスウェーデンの博物学者C・フォン・リンネで、最後の二項目である「属」を大文字から始まるラテン語、「種」を小文字

のラテン語で表記する二名式命名法を発明し、一七三五年に『自然の体系』という題名のわずかに二ページの冊子で発表した。ライオンの場合は「Panthera leo」となる。このように自然世界を分割していくことが科学の本質であるが、人間社会を分割する学問もある。

一七世紀のイギリスの医師で軍人のW・ペティは、著書『政治算術』で社会の仕事は農業、工業、商業に分類し、農業中心のフランス、工業中心のイギリスよりも商業中心のオランダが発展していると分析した。それから二五〇年後、イギリス出身の経済学者C・クラークが産業を、自然から有用な資源を獲得する一次産業、資源を加工して製品に転換する二次産業、製品を社会に流通させる三次産業に分類する産業分類を提言した。

消滅し始めた境界

ところが、これまでは分割されていた対象を統合する新規の傾向が登場している。筋力が労働の重要な資質であった時代には男性の職場と女性の職場という区別が存在していたが、筋力を代替する機械が次々と開発されてきた結果、土木女子、農業女子、林業女子などが登場し、一例として日本の建設産業の女性比率は約一七％になっているし、大学の建設関係の学科に所属する女子学生の比率も最近では二〇％近くになっている。

そのような社会の変化を反映し、ファッション業界も男子と女子を区別しないユニセックスを特徴とするブランドが次々と登場している。さらに世界規模でLGBTがキーワード

ドとなる時代の潮流から、あるアンケート調査では、初等・中等教育段階でLGBTの児童・生徒に対して服装による配慮をしている学校の比率が四割に到達している。生物の世界では性別は重要な基準であるが、その一種である人間の世界では異変が発生していることになる。

地域から転換する好機

西欧では産業革命以前、日本では明治維新以前、仕事の大半は家内工業であったが、織物機械や加工機械が開発されて、人々は工場で作業をするようになった。それらの機械が自動で稼働するようになると、工場などで労働する人間は減少し、多数の人々は都会のオフィスで仕事をすることをようになった。日本の場合、この三次産業に分類される職場で仕事をする人々の比率は、一九二〇年の二四％から、最近では七三％に増加している。

この三次産業の比率の急増はインターネットが象徴する情報通信手段

の急速な浸透の影響であるが、その効果は新型コロナウイルスの感染拡大により一気に拡大した。政府によるテレワークの導入状況の調査結果によると、二〇〇〇年代初頭には八％前後であった比率は、新型コロナウイルス蔓延直前の二〇一九年でも約二〇％であった。ところが感染が爆発した翌年には、一気に五〇％近くまで急増したのである。

その転換はNHKによる「国民生活時間調査」でも明確である。自宅で仕事をする人間の比率を二〇一五年と新型コロナウイルスが流行し始めた二〇二〇年とで比較すると、東京では二％から一二％、大阪では四％から一一％に急増している。その影響で、家事に充当した時間は、男性の平日の場合、同一の期間で五四分から六九分に、休日の場合は一〇一分から一三五分に増大している。詳細は省略するが、女性の場合も傾向は同様である。

このような傾向を反映し、東京都心五区のオフィスの空室比率は、新型コロナウイルスが流行する直前の

二〇一九年には一％台であったが、流行開始以後は一気に四％以上に上昇し、値上がり一方であった賃料も停滞し、一部では下降さえしている。同様に首都圏の住宅用地も上記の期間に三％程度の値下がりになっているし、大阪市中心部では土地価格が値上がりしているものの、周辺都市の大半では値下がりしている。

地価はすでに上昇傾向にあり、一連の変化が短期か長期かの判断は難問であるが、参考になるのはベストが席卷した一四世紀のヨーロッパである。この災難の回避には都市から田舎への逃避が唯一の手段であったが、さらにJ・グーテンベルクが発明した活版印刷という情報技術が教会という権威の失墜を加速し、社会は激変した。今回もパンデミックと情報技術が既存の社会秩序の巨大転換を促進するかもしれない。当時、中心ではなく周辺から転換が発生したように、今回も地方からの転換の好機である。

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男



昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究することともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。

「AIに使われる人 AIを使いこなす人」
詳細は35頁をご参照ください

新刊

